原綾子▼御夢の跡ー大塚岳峻▼大楠公ー原島旭粧。

日本琵琶楽協会定例研究会
二月十二日(日)昼東京文京区根津会館（五百円）。玉藻の前ー藤内旭須美▼城山ー大知里穂山▼白虎隊ー今井朝子▼石田三成ー古川旭神▼現代小曲ー水藤五郎▼設楽ケ原ー山下晴楓▼（講評）演奏をきいてー金田一春彦氏。

テレビ・ラヂオ琵琶放送
○一月十八日(水)夜八時十五分NHK教育テレビ「邦楽まわり舞台」でフイルム構成による怒濤逆まく博多沖を背景に〝元寇〟を、続いて百花らんまんの背景で〝吉野山懐古〟を中村旭園女史が花柳三紫の立方で各十五分間放映。外に常盤津舞踊一。
○一月二十六日(木)昼三時十分NHK・FMラヂオ。〝五位鷺〟水藤五郎氏（関口可悦氏の十七絃伴奏）、〝鉢の木〟ー押田旭窈女史放送。
○二月九日(木)同右、〝屋島の誉〟荒井姿水、〝八甲田山〟友吉鶴心両氏放送。

―（予　告）―

○…京都琵琶協会三月例会　三月五日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅。六時から幹事会。
○…ラヂオ琵琶放送　三月九日(木)昼三時十分NHK・FMで鈴木流泉氏〝安達ケ原〟、村木桜柳女史〝湖水乗切〟放送
○…晴風会春季演奏例会　三月十一日(土)夕六時東京杉並区立高円寺会館。（会長浅野晴風氏）。
○…第一回琵琶楽名流会　三月十一、十二(土)(日)両日十一時ー十七時京都市烏丸夷川上ル京都商工会議所ホール、主催日本琵琶楽協会関西支部。
○…各流派女流琵琶演奏会　三月十二日(日)昼名古屋市大須福祉会館、主催阿部久子女史。
○…琵琶三美会の竹生島弁財天奉納演奏会　三月二十一日(木)昼。（一般の随行随意）

あとがき

寒い冬がようやく終らんとし千秋の思いで待ちに待った陽春の好季がほどなく迎えられる●前号「あとがき」で、琵琶奏者は口と手を借りて心で弾奏するもの、聴者は耳を借りて心で聴くもの、という意味のことを書いたところ琵琶人や琵琶ファンのお方など数氏からこれに共鳴する主旨の手紙や電話を頂戴して編集子は今更ながら生意気な言を弄したことを面映ゆく思っている●話は変るが、琵琶楽の向上発展に資する一助にもと、たまたま一琵琶人の動向などに関する記事を最近両三回に亘り紙上に取り上げたことに就て意外にも京絃社がこの琵琶人から金員を貰って書いているかのような蔭口を叩く人があるという風聞を耳にして編集子は忿懣やるかたなく不愉快千万である●前にも一度この欄で書いたと思うが京絃社は金銭や品物などで左右されるような所謂ブン屋的な事は決してしない●無論上記の琵琶人からこの事によって嘗って一銭のお金も受取っていないし今後も絶対にあり得ないと断言して憚からない●京絃紙は人の名誉を傷つけるような記事は載せない、と同時に琵琶楽の発展向上に役立つと思えば今後も特定の琵琶人の提灯持ちをしているかのような記事を載せることも有り得る●斯様な場合京絃社が私腹を肥やす目的でやっているのでは決して無いという事を肝に銘じ物事を色眼鏡で見ないようにして貰いたい●京絃社は飽くまでも公平無私無慾でありたいと平常心がけている●読者諸彦に於かれても琵琶界に益するとお考えになる事があらば大きな事でも小さな事でも結構、二十円の葉書、五十円の切手代と手間を惜しまずにこの主旨に添う内容の御寄稿をお願い申し上げる。

昭和五十三年三月一日発行（非売品）
編集者　植村　寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第二八五号　京絃社

西郷隆盛の魅力を語る（四）

ー朝日新聞からー

編集部

東大には無理

（司馬）たとえば、徳川慶喜の首を見るまでは戦をやめない、といっていた。これは一種の観念論で、慶喜に個人的な憎くしみがあるわけではないのだけれど、マスコミの発達していない当時では、前王朝の主役の首をはねねば革命の成就を周知できないということがあった。のちにそれが一夜で江戸開城へと変わるわけだが、そのあたりの革命家としての西郷像はたしかにきらっている。おっしゃる通り、西郷は戊辰戦争で人変わりしている。それを卑俗なレベルに引き下げていけば、西郷という人は絶対東大や京大に入れぬタイプの人だった。若いころソロバンができる程度で、勉強ができたという話は伝わっていないし、剣術はまるでダメ、相撲はとったがこれも強くない。センダンは双葉より芳しいというようなところは全然なかった。ただ、無私ということが人間を引きつけるタネになる、ということを知っていたのではないか。生物とは私と欲望があって生物なので、無私ということはありえないことなのだが、脂汗を流して自分の中に二、三%の真空間をつくれば、そこに何千人、何万人が入りこんでこれるということ。その前提には、自分には何の能もないという自覚があった。すぐれた人間を使って何事かしたいが、そのためには無知の方がいい、ということが若衆頭時代の経験で身についていた。数%の真空空間を体の中につくる、というようなことは西郷自身いっているわけではないが、「敬天愛人」というのは、このことだろうと思う。

だが、その西郷に一つだけ自負があった。野戦攻城の武人としての才能があるということ。これは私人としての西郷がそう思いたいところだが、これが戊辰戦争を通じて大村益次郎にひっくり返されるわけだ。大村の戦術が当たって西郷の出る幕がなかった。

（萩原）それにしても、我々がいま西郷のことをあれこれいえるのも、大久保が明治国家の建設をやってくれたからだ。たしか海音寺（潮五郎）さんのいわれたことと思うが大久保と西郷は対になっていなければダメなのだ。この二人は分業というかそれぞれの役割を自覚してそれを果たしたのではないか、という気さえする。

（司馬）自然に投手と捕手の役割を演じたわけだ。幕末は西郷が投手で、維新後にそれが逆転する感じだ。西郷が征韓論で辞職した時、ある人が「これから日本はどうなるのだろう」というと、西郷が「大久保さんがいるから大丈夫」といったという。大久保をかっていたのは西郷が一番だった。

（萩原）それと大久保が死んだ時西郷の手紙を持っていたという。こうなると話がうまくできすぎている感じだが……（笑）。鹿児島へいって一番感動するのは、矢張り西郷墓地だ。

（司馬）西郷墓地とは西郷の墓を中心にずらりと並んだ陸軍の墓地だが、一つの精神の行きついたところ、批評しがたい何かがゆきついた果て、という感じが西郷墓地にはある。考えられないことだが、時の明治政府が、つまり大久保が戦死者を厚く葬ることを許した。革命は権力闘争というパターンにはまらぬものがある。

（萩原）いわゆる維新の三傑のうち、インテリである木戸が一番わかりやすい。大久保

はきびしすぎる。西郷となると霧につつみとまれたような感じがする。

（司馬）西郷は私にとって日本史上最も会ってみたい人物だ。会ってみなければよくわからないから…。とにかく、中国と西郷とはいくら語っても語りつくせぬテーマだな。

（終）

アーネスト・サトウ（Ernest Mason satow.一八四三ー一九二九）イギリスの外交官で日本学者。一八六二（文久二）年、イギリス公使館の通訳見習として来日、日本語を習得し、明治維新前後、オールコック、パークス両公使のもとで縦横に活躍。一八九五（明治二八）年には公使として再来日。前後を通じ約二十五年滞日し日本の歴史、宗教、風俗などを研究し、『一外交官の見た明治維新』などの著作をのこした。

ウイリアム・ウイリス（William Willis.一八三七ー九四）イギリス公使館付の医師。サトウと同じ文久二年来日し戊辰戦争など幕末の動乱期に外科医として治療活躍し東京医学校に迎えられた。のち西郷に招かれ鹿児島の医学校と病院を指導したが、西南戦争を前に日本を離れた。

左宗棠（さそうとう　一八一三ー八五）中国清末の政治家、軍人。太平天国軍の鎮圧に功を挙げ曽国藩、李鴻章につぐ政界の実力者となった。海軍の近代化につとめ、フランスの技術援助で福州に造船所を建設、洋務運動の先駆となった。

桐野利秋（一八三八ー七七）薩摩出身の幕末・明治の志士。旧中村半次郎。西郷隆盛のもとで国事に奔走。維新後、陸軍少将となったが征韓論政変で西郷と共に下野。西南戦争では陸軍の総参謀長をつとめ、城山で戦死した。

戊辰戦争　一八六八（慶応四・明治元）薩摩、長州など倒幕派と徳川幕府方との間で戦われた全国的な内乱の総称。鳥羽・伏見の戦に始まり、江戸東征、彰義隊討伐、奥羽北越戦争と続く。

大阪夏の陣（八）

山川流水

樫井川合戦、これだけの激戦がありながら、大野主馬治房は一向に人数を繰り出さぬ。

大野には四人の大将がいた。塙団右衛門、岡部大学、米田監物、淡輪六郎である。淡輪六郎は大野に向い「団右衛門と岡部を見殺しにされる気か」「彼等は抜け駈けをした、おれの命令に背いたのだ」「お黙りなさい、戦というものは時には抜け駈けをしなければならぬ場合もある、この儘では二人は討死します。私は二人を見殺しには出来ない、あなたのような憶病者に従ったのは我等の災難」と怒って出陣したが、既に塙、岡部は戦死したあとで、乱戦の後淡輪も討死にした。

勝ち誇った浅野勢は怒濤の如く進撃してきた。大野主馬は早速陣容を整え鉄砲組を繰出して応戦したが味方は段々追いまくられ遂に総崩れとなった。憶病者の主馬はたまらず馬に鞭をあてて逃げ出した。

配下もこれに従って泉州境まで後退し石津川を渡ったとき、四大将の最後の一人米田監物は怒り心頭に発し「大野氏、これは何たるザマだ、このまま大阪城へ帰っては軍師真田幸村殿や右大臣秀頼公に、何のかんばせあって面（おもて）が向けられよう。幸いここは石津川だ、この川を味方にして敵をくいとめよう」と進言したけれども、逃げ腰の大野の耳には入らぬ。やむを得ず監物は腹臣の部下数十人と共に川を渡り、進んで来る敵を相手に無二無三に槍をつっこみ奮戦したが、衆寡敵せず美事な戦死を遂げた。

浅野勢は泉州大名を合わせて大阪へ迫った。「大阪城は外堀を埋め二の丸も埋ってはだか同様だ、それ押しかかれ」。勇気百倍、物凄い勢いで泉州堺を過ぎ、天下茶屋近くまで押寄せた。すると反正天皇陵の一面の森の中から鉄砲が撃ちかけられ、更に十五、六門の大砲が浅野勢の横っ腹に撃ち込まれた。真田幸村の同勢がここに待ち受けて浅野の同勢を壊滅状態に陥し入れたのである。

記録、史料をまとめた「日本戦史・大阪役」によると一岡部大学と塙団右衛門が先陣を争って飛び出したのを、大野治房は知らなかった。そこへ淡輪六郎兵衛重政の部下が逃げ帰って、先頭部隊の大敗を報告した。驚いた大野は兵を率いて樫井に急いだ。

浅野部隊本部では、勝ちに乗じて大阪方と一戦、大阪城まで攻めようという案も出ていたが、樫井合戦の勝利は抜けがけの功を争って攻めてきた大阪方の作戦負けのためだ。いま大野の大部隊を相手にしては勝ち目がない。加えて和歌山領内は各地で一揆騒乱が起きている。今は後退して之を鎮圧すべきである、という意見を浅野長晨が決した。

大野治房が樫井に着いてみれば、和歌山の兵隊は一人もおらず、ただ戦死者の遺体が累累としているばかりだった。その中に塙団右衛門の首のない死体を発見、火葬にした。治房は浅野の部隊を追撃しようとしたが、夜になった。その上土地不案内の道、また岸和田の小出大和守吉英が後方遮断のおそれもあるというので、部隊を纏めて大阪へ引き上げた。

「大日本史料」があげる文献古文書では、大野主馬治房を戦闘的な人物として、勇猛ぶりを記録しているのに対して、大阪庶民の中に語り伝えられた話では、彼を卑怯未練な大将にして兎角笑いものにされている。

元大阪城天主閣主任岡本良一氏は「治房は冬の陣でも勇戦活躍しているし、大阪落城まで戦い抜いている。なぜ彼は笑われ者に仕立てられたのか」と疑問視している。

大野治房も道犬も落城のとき逃げ出したーこれは話を面白くするため、気の毒にも貧乏クジを引いた、という説が本当らしい。

時　三月十一日、十二日両日午前十一時
所　京都市中京区烏丸通夷川上ル
　　京都商工会議所ホール
主催　日本琵琶楽協会関西支部

第一回　琵琶楽名流会

（第一日）薩摩四、錦心流三、筑前一二　計　一九曲
（第二日）薩摩〇、錦心流八、筑前一二　計　二〇曲
（入場料　両日共各千円）

峯のあらし

高倉天皇というみかどは、平家物語によれば「むげに幼主のときより性を柔和にうけさせ給へり」、やさしいお気立ての方でした。

まだ八才のいとけない年頃に即位され、ほんの少年のころに結婚させられ：帝は物心つく前から、平家一門の政治的配慮で、その人生を人々に操られ、動かされ、強いられてきたような運命の方でした。

おん父は後白河法皇。平清盛は義理の伯父にあたり、二大実力者の間にあって、天皇とは名ばかりの地位、そして結婚相手は、清盛の娘、徳子。

帝は仕組まれた運命のレールを、そのまゝ動かされて青年となられました。

ところが、帝がご自分で運命をえらばれる日が来ました。それは、当時宮中第一の美女で、ならびなき琴の名手といわれた小督局（こごうのつぼね）と、恋におちられたのです。

この恋は清盛の怒りを買いました。わが娘の中宮徳子に一日も早い皇子のご誕生を願っている清盛は、帝がほかの女に心をうつしていられるのに堪えられないで、小督を亡きものにせよ、と云いつけます。

小督は心を痛めました。わが身はどうなっても帝にご迷惑がかかっては、と「ある夜内裏をいでて、ゆくへもしらずうせ給ひぬ」。

突如、恋をひきさかれた帝は悲しみにくれて、小督のゆくえをたづねられましたが、清盛をおそれてお味方をする者もない有様。八月の十日あまり、月の美しい宵です。帝は「人やある」と呼ばれます。遠くに控えていた仲国がお答えしますと、小督のゆくえを知らぬかとのお尋ねです。嗚では嵯峨の奥にかくれすむそうな。探し出すことはできぬものだろうか。涙をおさえてのお尋ねです。

仲国の心は、若い薄幸な二人の恋人たちへの同情で一ぱいになりました。よろしうござ

います、私がおさがしいたしましょう。この美しい月夜、琴の名手の小督どのは、みかどのことを思い出して琴をひいていられるかも知れませぬ、琴の音をたよりにあちらこちら探してみましょう。彼はすぐさま「名月にむちをあげ、そこともしらずあこがれゆく」のでした。このあたり、まるで大和絵をみるような「平家物語」の名文です。

「亀山のあたり近く、松の一むらある方に、かすかに琴ぞきこえける。峯のあらしか松風か。おぼつかなくは思へども、駒を早めてゆくほどに、片折戸したる内に、琴をぞひきすまされたる。ひかへて是をききければ、すこしもまがふべうもなき小督殿の爪音なり。楽は何ぞとききければ、夫を思うて恋ふとよむ想夫恋という楽なり。さればこそ、君のおんこと思ひ出まいらせて、楽こそおぼしけれ、此の楽をひきたまひけるやさしさよ」。

みつけ出された小督は、ひそかに内裏へ迎え入れられました。禁じられせかれた恋であってみれば、よりいっそうそれは二人を暗く烈しく包んだことでしょう。しかしたちまちその恋はおそろしい清盛の耳にはいってしまいました。小督は捕えられ、尼にして放たれました。帝は憂憤やるかたなく、苦しみにやつれ恋にやせ、ついにおん年二十一というみじかい生涯を終えられました。小督は濃い墨染の衣をまとわれたとき、花のような二十二才だったと伝えられます。

いま小督の墓といわれるのは大井川の渡月橋のそばと、東山清閑寺の高倉天皇の御陵の内と、二つありますが、私としては、高倉帝のそばによりそうように埋められたと思いたい気がしますーもとより御陵の内は、さしのぞくことは許されませんが、ひともとの杉の根元にひっそりと宝匡印塔（ほうきよういんとう）が据えられているそうですー私が訪づれた日は寒いその一日でした。ひえびえする空気、折々こぼれる霧雨のしずく。と思うとふと雲が切れてもみじの梢に日があたり、全山さわやかに青くなりました。

すがすがしい玉垣のうちにその木は立っていました。すでに肉体は大地に還り、いまは二人の恋と、月夜の琴の音だけが八百年ののちにも、れいろうと澄んでひびき交わしています。恋人たちのやさしいねむりを思い、私はふり返りふり返り、石段を去ったことでした。（田辺聖子「文車日記」より）。

寸言（38）

千利休

本名は宗易、俗に田中与四郎とも云った。大阪堺の人で武野紹鷗に学び茶道を完成させた。千阿弥とも称し初め織田信長に、のち豊臣秀吉に愛されたが、やがて思想上一歩も譲らず対立したことは史上有名で、一説に我が娘を秀吉の側室に望まれこれを潔よしとせず遂に自刃に追いこまれたともいわれる。

我が道を行く

六十五年（五七）

西郷天風

尤もこれは、予選参加者六百名にも及ぶという東京地区に於ける設備で、京大阪以西、九州方面の三百余名に対する状況については、知るよしもなかった。

なお予選の演奏時間は、一人三分以内と限定され、まづ、左右の演奏席には、初めから琵琶を抱いて正座し、一方の演奏が終るや、次ぎは間髪を入れず、すみやかに演奏に取りかかるようこんこんと指示され、いよいよ開始されたのが朝の八時だった。

かくて、次ぎから次ぎえと、息をもつかせぬ緊迫の十時間で、予定の二百名が終った時私は帰途についたが、この状態を三日間も続ける飛島氏ら係員の労苦は更なり、この計画の容易ならぬ大事業であることを改めて知らされた。

翌日は二百一番から始められ、私は午後の四時ごろ演奏にかかったが、まあまあの程度だったとおもう。曲目は〝旅順開城下段「乃木大将、ステッセル両将軍水師営会見」の一節〟に〝山川草木〟の詩吟を添えたものだった。

この第一次予選の結果は、東京だけで十二人と発表され、そのなかから五人の大会出演者選出の、第二次予選が行われたのが旬日後のことで、それはローカル放送によって一般に公開し、審査は斯道に造詣の深い社界人の投票に依存して、琵琶人は一人も加えず、専ら厳正を期したのであった。

かくして、筑前琵琶の大坪旭邦、原田旭柳、薩摩正派の木原平治、西郷天風、錦心流の森盛蔵の五名が当選、大会出演の権を得たのであった。

兎に角邦楽界初めての全国放送琵琶大会という此の催しは、放送局としても二度と開催はしないほどの事業だったであろう。出場人員こそわずかに十三名ながら、その地域は、北端の北海道及び東北から各一名宛、関東は東京を中心として五名をかぞえ、関西は京都大阪地区で四名、それに四国九州の各一名宛の計六名だった。

やがて陽春三月、いよいよ全国大会の火ぶたは切られた。まづ北海道から初めて、関東、関西、四国九州と順次放送を続けること実に二時間半、結局東京から二名、長崎から一名の都合三名が選出され、放送中の下馬評として、一位が天風、二位が大坪旭邦、三位が何れにありやと定めかねていた。ところが最後の長崎に至って、いみじくも、一位まで取られてしまった。しかもそれは、毎年三ケ月ずつ長崎から上京して橘旭宗に通い、その都度師範代である大坪旭邦師の指導を受けていた池川旭容女史だったとは、正に江戸の仇を長崎で討たれた訳だが、その真相が意外なことから解明されたのも面白い思い出となった。

この全国放送琵琶大会は昭和十年頃のことで、それから二十年も経た二十九年から三十六年までの約七年間、九州に遊んでいた私だが、ある時、熊本から鹿児島へと放送を楽しみながら、上海在留時代の友人を訪ねて宮崎に至り、彼の奔走で開局したばかりの宮崎放送局で放送することとなり、その打合せの日、初対面の放送部長どの、私の名刺に見入りながら眼を輝かし、

「あなたが、天風先生でしたか」と椅子を進めて来た。思いもよらぬこの言葉に驚いて「私を御存じでした？」と恐縮すれば、部長殿曰く、「かって長崎放送局在勤中、全国放送琵琶大会が催され、その際、何が何でも一位は九州が占めなければ本場の面目が立たぬというので、票数集めに奔走したその敵手があなただったから、よく覚えておりますよ。」

この部長殿、今は何処に居られるか知らぬが、有料の放送者としては私が第一号であった事は、報酬の支払伝票が未だ用意してなかった宮崎放送局では、私が熊本から貰って来た伝票を見本にして印刷し、次ぎの日私はその伝票によって放送料を頂戴した次第である。

処でこの記述は、二た昔ほどの空間をおいて、結びを得たことに興味を有つ思い出の一つである。

琵琶の音にのせて

平家没落の哀史を語る

辻旭城

京都洛北大原の里を歩く時〝平家物語〟を忘れては、平凡な山里の風景としか感じられない。京都では、目に触れるもの総てに古典や歴史がまつわりついている。風景に歴史の重みが加わって深みを増している。好むと好まざるに拘らず、過去を離れられないのが古都である。

寂光院のある草生の里は、大原盆地の西北隅にある。三千院から律川沿いに道を下っても、呂川添いに下っても共にバス道に出る。そこから車なら小学校の北から山添いに入ればよい。

寂光院の東に建礼門院の陵、その附近に後鳥羽、順徳天皇陵に向って大原西陵とよばれる小さい五輪石塔の墓標は、薄幸な皇后の生涯を物語っているようである。寂光院を少し奥に入ると、右手石段上に建礼門院に最後まで仕えた阿波内侍と大納言佐局の墓が杉の大木の下にある。

文治二年（一一八六）四月、後白河法皇は洛北鞍馬寺参詣を兼ねての観桜を名目に御所を出て建礼門院を訪ねられた。〝平家物語〟

によれば「静原から江文峠を越え大原の里に出ると、西の山の麓に一宇の堂あり、即ち寂光院これなり、ふるう作りなせる前水木立よしある所のさまなり、甍破れては霧不断の香を炊き、とぼそ落ちては月常住の灯をかかぐ」。琵琶歌〝大原御幸〟である。

涙のうちに建礼門院は「私は御仏の説き給うた六道とやらを生きながらにして体験しました、清盛の娘として生まれ、安徳帝の母となり、一天四海は何ごとも思いのままで、明けても暮れても楽しみ栄えましたが、人間は愛する者に別れ、憎しみ合う者が会わねばならぬとか、やがて源氏に追われ西海での船上生活は食に不自由し、又水がなくて大海の上にいながら飲めない苦しみは餓鬼道そのものでした。しかも絶え間ない戦の声、太刀の音弓矢の響き、それは阿修羅の世界でした。

戦に破れて無惨にも親と子、夫と妻の生別は戦さのならわし、〝南無妙法蓮華経〟と小さい手を合わせて西海に沈んだわが子安徳幼帝の姿は生涯忘れられません。しかも死に切れずに波間に漂う私は、心ならずも源氏の荒武者に助けられ、それからの毎日は〝畜生〟の生活としか云いようがありませんでした。」

〝六道〟とはこの世界を十に分けたとき、声聞、縁覚、菩薩、仏の四つの悟りに対して迷いの世界を意味する。生きながらにして六道を駈けめぐった建礼門院は、誠に数奇な運命の女性であったと云えよう。

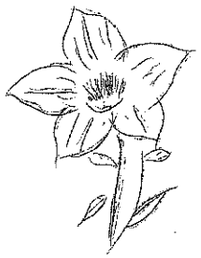
しかし、この大原で漸く安住の地を見いだし、ひたすら我子安徳帝をはじめ平家一門の菩提を弔らい、仏の救いを念じ続けた女院は、建久二年（一一九一）二月中旬、西の空に紫雲棚引き、異香室に満ち、音楽空にかなでられる中で、阿弥陀如来に迎えられてこの世を去り、永遠の安らぎの世界に往生した。

源平両軍の争いについて世の無常を感じる場面は、勝者の源氏方にも幾つかあった。一の谷の戦いにわが子と同じ年頃の若い敦盛を、心ならずも討ち果たした熊谷直実は、無常を感じ出家して法然上人の弟子となった。

当時上人の説く浄土念仏の教えに不信を抱いた旧仏教の学僧たちが、上人に討論を申し入れる。世に有名な〝大原問答〟である。

この討論会は、文治二年（一一八六）大原の勝林院で命をかけての問答が続けられたのであるが、このとき熊谷蓮生坊は上人に付き添い、師に万一の事があらば、と法衣の袖に鉈（なた）を隠し持って随行した。

これを知った上人は、関東武士の心を捨て切れない蓮生坊にその非をさとして鉈を捨てさせたという。今もなお勝林院の前には〝なた捨ての藪〟が残っている。



錦心流一水会
会長、副会長改選

昭和五十年十月小山田賞水会長逝去後一年間は理事合議制で運営していたが、昨年秋の総会に於て会長飴谷六水氏、副会長中谷襄水、山口速水、鈴木琢水三氏の就任が決定した。有能揃いの陣容で一水会今後の発展が期待される。（本部は東京都文京区大塚五丁目六番十四号、電話(03)九四一ー四四六一番、郵便番号一一二）

弘前琵琶同好会の集い

旧臘十八日(日)昼。合奏太田道灌ー中村光水、平尾桜水、福島光峰▼西郷隆盛ー佐藤森水▼石童丸ー福島調水▼姫ゆりの塔ー佐藤学水▼大高源吾ー木下旭青▼竜の口ー三浦渓水▼屋島の誉ー桜水▼八甲田雪の進軍ー光水▼楠正行の母の教え（古典〝河内の宿〟の現代語版）来賓柴田富山。（毎月第三日曜会同。）

一水会多摩支部月例研修会

旧臘十八日(日)昼小金井市福祉会館（支部長伊藤磐水氏）。月下の陣ー伊藤▼元寇ー吉田▼詩吟篠宮燮水▼竜の口ー加藤錦陽▼井伊大老ー来賓楊嶽水▼父乃木将軍ー磐水▼本能寺ー小川吐水▼城山ー石井效水▼山科の別れー中村修水▼白虎隊ー清水源城。（外に村木桜柳、水藤五郎、坂井眺水の三氏来遊されしも時間の都合で欠演）このあと忘年宴。七時閉会。

京都琵琶協会月例茶話会

①一月十六日(木)昼二時京都西大路駅前料亭京みやこで開催。会員数氏演奏のあと本年度総会に移り昨年度事業報告、会計報告があり、役員改選の件、本年度事業計画案等は二月の茶話会で再検討することを話合った後新年宴会に移り隠し芸など続出、十二分の歓をつくして七時目出度く閉会解散した。出席者＝馬場鴨水、戸倉旭嶺、戸田旭公、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、古谷竟水、荒木旭媛、桜井旭富、木下皇水、峰口高昇、平井春嶺、植村寞水。

②二月五日(日)昼会員古谷竟水氏宅で開催、病気静養中の古谷氏も比較的元気で一同憂眉を開いた。両三日間続いた昨日までの酷寒も今日は嘘のように十度二分という立春気分の中を平井、水内、桜井、古谷、牧、安住、山岡、矢吹、梅原、田中、戸田、馬場、植村の諸氏出席。数氏研修演奏のあと宿題の協議に移り、(1)役員改選の件＝平井、梅原、矢吹、田中、牧、木村、植村の七理事重任の外新たに馬場鴨水氏を理事に選出、事務所は従来通り平井春嶺氏方に置く。(2)会則制定の件＝襄に創案の原稿を全会員で再検討し三月の例会で討議の上決定発表する。(3)戦後再発足した当協会の創立三十周年（戦前からの通算約五十年）を記念して演奏会を開催の件＝会場の確保した上陽春の頃開催する事とし当日各自演奏の曲目を本日決定。以上協議を終り乾盃、食事を共にして七時半散会した。（欠席者ー伊吹正陽、林田旭城、若宮旭登、野田彩水、戸倉旭嶺、山本旭英、荒木旭媛、阪本一峰、木村維水、木下皇水、峰口高昇諸氏。）

大阪琵琶同好会新年総会

一月十六日(木)昼奈良市一条町簡易保健保養センター。石童丸ー西川、野々村▼台湾入ー見城、竹中▼赤垣源蔵ー山田▼義家ー伊藤▼城山ー米原▼衣川ー安光旭明▼松の廊下ー矢野旭信▼神崎与五郎ー光旭仙▼鴨川の露ー辻旭城▼姫ゆりの塔ー石橋旭嶺▼舟弁慶ー田中歌水▼五条橋ー天津八千代。外に詩吟、舞踊、奇術等あり盛会裡に七時閉会。

菊水流新春吟舞会

一月二十五日(水)東京葛飾区公会堂。詩吟、吟舞等数番の外鈴木流泉氏来賓出演〝鉢の木〟。ー篠宮燮水▼鉢の木ー大富士岳鮮▼演奏なしー伊集院一城、伊藤磐水、大和田鶴道。このあと年頭の賀酒を交して散会した。尚今後は奇数月に開催することに決定した。

日本琵琶楽協会定期総会

一月十六日(木)昼東京豊島区高松高三会館にて五十三年度総会に続いて四時から新年懇親会を開き六時散会。

三位研修同志会第四十一回研修会

一月二十一日(土)昼三鷹市上連雀公会堂。年頭の辞ー伊集院皷城▼濤陽江ー鈴木鶴謳▼台湾入ー西村暠峻▼旅順開城ー田戸桜丸▼菅公ー八束一峰▼春日野ー清水源城▼弾法（西田、小田原両師の合の手十番）ー坂本錦道▼春日野ー中村晃憲▼時頼と常世ー皷城▼吹雪の敵

日本琵琶柏会・筑前琵琶旭登会例会

一月二十五日(水)昼東京西新宿柏ビル六階。各種弾法ー山崎錦幽▼本能寺ー平田旭舟▼異国の丘ー坂入俊風▼春の調べー本橋錦颯▼常陸丸ー長岡旭玲▼二〇三高地ー青木早水▼彰義隊ー杉山旗水▼門出ー加藤錦陽▼羅生門ー高田栄水▼常盤御前ー橋本草水▼舟弁慶ー若宮旭登▼別れの緒琴ー雨宮映月。このあと附近の料亭「にいむら」に席を移して新年の小宴を張り九時散会。尚今後は毎月首記両会の合同例会を開催することとなった。

琵琶楽名流大会

一月二十八日(土)昼東京銀座ガスホール、東京新聞社・日本琵琶楽協会共催（千円）。井伊大老ー都穂風▼衣川ー古川旭神▼小野訓導ー彼ノ矢洲友▼湖水渡ー清川嵐舟▼青葉の笛ー山下旭瑞▼大高源吾ー都錦穂▼常盤御前ー石田脩水▼彰義隊ー仲川秀邦▼舟弁慶ー三栖旭峰▼白虎隊ー前田洲月▼城山ー須田誠舟▼若き敦盛ー中村旭園▼会津なよ竹ー藤波桜華▼宮本武蔵ー杉山旗水▼菅公ー八束一峰▼道成寺ー広瀬翠紅▼八甲田山ー友吉鶴心▼鉢の木ー遠藤鶴東▼羅生門ー若宮旭登▼名月逢坂山ー鈴木流泉▼茨木ー押川旭葉▼扇の的ー木